

ペン俳句会 句会報 (三五十六号)

令和六年五月二日 (木)

兼題『鶯』、席題『巢』

句会を、今年四月と同じ場所で開催。出席は十一名 (大阪の金魚姫さん欠席)。(投句十二名)

宮原 凧

殿 (しんがり) の巢立ちし部屋よ緑立つ

花片を付けたるままにたたむ傘

雨の日のブラインドタッチ亀の鳴く

途中下車み知らぬ街の桜かな

散骨もいいなと思ふ春の海

鶯の鳴き止みしより耳澄ます

浜口 金魚姫

鶯の声繋ぐ手に力込め

巢立つ雛五番目鴉にさらわれり

げんげ田に入りて少女の声になる

玻璃窓は枝垂れ桜の額縁に

見えずとも胸張る姿鶯来

鶯来良きことのみを日記に書く

森田 元斐

蟻の巢や刈り揃へたる芝の中

鶯の鳴かぬひとまや守護の杜

石楠花や好みのタイを締め直す

新緑の舎 (いえ) 甲高き保育園

白鷺の白鷺を追ふ傍の川

薄明の羽音のどけき大栗川

中村 晃也

アトリ工の窓を開きて待つ初音

勇気もて巢立ちの時や鳥の子

鶯や山峡にある分教場

針金のハンガー混じる鳥の巢

警官に守られ進む軽鴨 (かも) の列

數鶯汐の香淡き切通し

大津 そうかい

鶯の響 (とよ) もや靈気全山に

鳥の来ぬ巢箱の黙や大き口

桜薬降るや別れを告げらるる

春霖や老いの難問生きたは

葉桜やショートパンツの朝帰り

暴走の未成年の死金亀子

安藤 晃二

天守より琵琶湖の遥か花霞

ケキヨの音の爆音と競り柳の芽

灌木の微かに揺れて鶯来

OBや蜂の巢に触れ大騒ぎ

茅葺の母屋眼下に鯉幟

池澱むその声太し牛蛙

長尾 進一郎

木の上に鳥の巢の影春風

ようやくの風を喰らひて鯉幟

鶯の一声鳴きて野辺静か

若草の弾力優し足の裏

春風に川面のそつと波立ちぬ

雨だれの音の間遠し春の風呂

新田 ゆふき

鶯の音の籠る道迷い道

鷹の巢を捉ふるレンズ風光る

鶯に出迎えられつ桃源郷

推し人は吉野の花にとく逝きぬ

ここや行けあそこ登れと鶯は

鶯や顔振峠ひとけ無し

志村 良知

なき数に入りし名慕ひ花の散る

ケキヨと連呼鶯若し山の肌

みなくちの渦にハートの花筏

一筋に御神渡りめく花筏

つばくろの巢の守るロビー山の宿

ガイド若し黄色い歓声花の山

松田 一文字

風食らひ腹をくねらせ鯉のぼり

四十雀高き梢の恋の歌

巢に帰る親へ口開け燕の子  
鶯の経よむ声か藪の中  
道横断白昼堂々孕猫  
白き腹見せ旋回の燕かな

内藤 まりこ

巢造りやハンガーもてり親鳥  
幼子の手足や小さき桜貝  
いちはこの並びて咲ける初節句  
木香薔薇ひしめきおふて咲き揃ふ  
ジャスミンの蔓に香りや春深し  
鶯のケキヨケキヨケキヨと朝の黙

西川 知世

鶯や地震にくずほれ能登瓦  
校庭の巣箱の底にクラスの名  
吾の影を音もなく越し恋の猫  
轟るや起重機湾へ首もたげ  
池の面の空を恋せる落椿  
逝く春のトクノに絶えぬ工事音

次回は令和六年六月六日（木）、  
兼題は季語「初夏」（宮原凧さん出題）、  
席題は西川知世さん出題の「空」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

兼題は「初夏・しよか」。傍題は読み方を違えて「はつなつ」、書き方を変えて「夏初・なつはじめ」、首夏、孟夏。

木々の若葉がそよぎ、梅雨前の爽やかな陽光が窓に差し込み、家の内外を楽しむ季節である。

夏の期間（五月六日から立秋八月八日の前日まで）を、初夏・仲夏・晩夏と分ける。陽暦に当てはめると5月から7月をさし、新緑の頃から梅雨入り前ころまでを言う。近年、地球温暖化の影響を受けて季節感と肌感覚とがずれてきているのは否めない。期の始めと終りの気温と季節感のずれ、街ゆく人々の服装の季節感の薄れなど、戸惑うことが多い。しかしその中にも時の移ろいを見るのは現代の日本ならではの贅であるのかもしれない。句材は尽きないと言われる所以。

お早うと言ふはつなつのひびきなり  
赤き鶏のあかき卵を産みて首夏  
天辺に馬みて隠岐の夏はじめ

奥坂まや  
小林京子  
対馬智恵子

新潟の初夏はよろしや佐渡も見え  
初夏の山立ちめぐり四方に風  
たまさかは夜の街見たし夏初め  
海から無電うなづき歩む初夏の鳩  
初夏や腕に時計のない日曜  
初夏や旅の眼鏡を窓に拭き  
初なつの気球に笑窪ありにけり  
初夏の風色ある如く吹き渡る  
夏はじめ五臓六腑を水平に  
はつなつや啞へて猫が子を運ぶ

高浜虚子  
水原秋櫻子  
富田木歩  
西東三鬼  
菖蒲あや  
鷹羽狩行  
磯貝碧蹄館  
高木晴子  
宇多喜代子  
中山純子